

2020年度新聞協会賞応募作品一覧

「ニュース」部門	15社21件
----------	--------

「写真・映像」部門	16社21件
-----------	--------

「企画」部門	50社51件
--------	--------

合 計	53社93件
-----	--------

2020年度新聞協会賞応募作品一覧

「ニュース」部門（１５社２１件）	
被推薦者	作 品 名
朝日新聞東京本社 三菱電機サイバー攻撃取材班 （代表）編集局経済部 内藤 尚志	三菱電機へのサイバー攻撃のスクープと関連報道
〈作品概要〉三菱電機の社内ネットワークが大規模なサイバー攻撃を受け、機密性の高い防衛関連、電力や鉄道といった社会インフラ関連など、官民の多くの取引先の情報が広く流出したことをスクープした。情報流出に関する社内調査の情報を綿密に精査し、特報につなげた。	
毎日新聞東京本社 NHK問題取材班 （代表）編集編成局学芸部 小林 祥晃	スクープ「かんぽ不正販売を巡るNHK報道への圧力」
〈作品概要〉かんぽ生命保険の不正販売を報じたNHK番組「クローズアップ現代+」に日本郵政グループが抗議し、同調した経営委員会が会長を厳重注意していたことをスクープ。放送法は経営委の番組介入を禁じているが、公共放送の自主自律が脅かされている実態を暴いた。	
読売新聞東京本社 I R汚職事件取材班 （代表）編集局社会部主任・司法キャップ 間野 勝文	「I R汚職事件」を巡る一連のスクープ
〈作品概要〉東京地検特捜部が約１０年ぶりに政界にメスを入れたI R汚職事件を巡る一連のスクープは、特捜部による捜査をいち早く詳細かつ正確に報じるとともに、贈賄側の中国企業による政界工作の実態を詳報することで、I R事業を巡る利権の構図を浮き彫りにした。	
日本経済新聞社 編集局企業報道部次長 伊藤 正泰 編集局企業報道部 小泉 裕之 同 浅山 亮	カルロス・ゴーン元会長追放後の日産自動車の経営改革をめぐる一連の報道
〈作品概要〉ゴーン元会長逮捕で世界の注目を集めた日産自動車をめぐり、西川広人前社長の退任を皮切りに資金調達、生産能力削減など一連の改革を内外に特報した。ゴーン逮捕で亀裂が深まった世界有数の自動車連合がコロナウイルス危機で再結束する姿も浮き彫りにした。	

「ニュース」部門（１５社２１件）	
被推薦者	作 品 名
東京新聞 「再委託問題」取材班 （代表）編集局経済部 桐山 純平	「持続化給付金の再委託問題」のスクープと一連の報道
〈作品概要〉国の持続化給付金事業を受託した社団法人の実体の不透明であると２０２０年５月２８日付朝刊１面で特報。社団法人による事業再委託の構図、外注が繰り返されていたことなどスクープを連発。巨額の税金を投じた新型コロナ対策事業のずさんな構造を暴いた。	
産経新聞東京本社 新型コロナウイルス取材班 （代表）編集局社会部厚生労働省キャップ 伊藤 真呂武	「新型肺炎、日本で初確認」のスクープに始まる感染防止策の課題を指摘した一連の報道
〈作品概要〉中国湖北省武漢市で新型コロナウイルスを原因とする肺炎の発症者が相次ぐ中、日本国内でも初めて感染者が確認されたことを産経ニュースで特報。感染形態が不明確だったなか、「人から人」の感染である疑いを最初に報じ、社会に警鐘を鳴らした。	
産経新聞東京本社 東京五輪・パラリンピック延期に関する取材班 （代表）編集局政治部編集委員 阿比留 瑠比	東京五輪・パラリンピック延期に関する一連の報道
〈作品概要〉今夏に予定されていた東京五輪パラリンピックについて、政府が国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）との間で１年程度延期する方向で調整していることをスクープ。その後、延期の期間を１年程度としたのは２年延期となると経費が大きく膨らむことや、聖火リレーの日程などを考慮したことなどを詳細に解説する記事も掲載した。	
産経新聞東京本社 習近平中国国家主席の国賓来日延期に関する取材班 （代表）編集局政治部編集委員 阿比留 瑠比	習近平中国国家主席の国賓来日延期に関する一連の報道
〈作品概要〉中国の習近平国家主席の国賓としての来日が、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により、延期となったことについて２度にわたりスクープ。来日は年内見送りとした６月の２度目のスクープでは、事実上の無期延期であることも報じた。	

「ニュース」部門（１５社２１件）	
被推薦者	作 品 名
共同通信社 広島支局 新富 哲男	河井克行前法相による運動員買収のスクープなど公選法違反事件に絡む一連の報道
〈作品概要〉河井克行前法相の妻の案里氏が初当選した参院選で、河井前法相から依頼を受け報酬が認められない選挙運動をした男性に対し、案里氏の政党支部が約８６万円を支払ったことをスクープ。後に河井夫妻の逮捕につながる公選法違反（買収）を最初に報じた。	
共同通信社 客員編集委員（前編集局特別報道室編集委員） 澤 康臣	「戦後主要憲法裁判の記録を裁判所が廃棄」のスクープと一連の報道
〈作品概要〉自衛隊に一審違憲判決が出た長沼ナイキ訴訟、沖縄基地使用を巡る代理署名訴訟など、戦後の主要憲法裁判の記録の多くを、全国の裁判所が既に廃棄していたことを調査で突き止めた。歴史的公文書の損失で審理検証も不能に。報道を受け裁判所は方針を是正した。	
時事通信社 ワシントン支局 渡邊 健作 同 出井 亮太	「米大統領、駐日大使にワインスタイン氏指名へ」のスクープ
〈作品概要〉トランプ米大統領が駐日大使に保守系シンクタンク「ハドソン研究所」のケネス・ワインスタイン所長を指名する方針を固めたとスクープした。この報道から３か月後に大統領は指名を正式発表し、非常に早い段階で駐日大使人事を正確に報じたことが証明された。	
読売新聞大阪本社 社会部外国人労働者問題取材班 （代表）編集局社会部次長 中沢 直紀	外国人労働者問題を巡るキャンペーン報道
〈作品概要〉新在留資格「特定技能」の創設を機に外国人労働者を取り巻く構造的な問題に迫った調査報道。新資格の取得者数は伸び悩み、技能実習生や偽装留学生への依存をますます強める日本の現状を見つめ、目指すべき「外国人との共生社会」のあり方に警鐘を鳴らした。	

「ニュース」部門（１５社２１件）	
被推薦者	作 品 名
中日新聞北陸本社 編集局報道部 前口 憲幸	「地方移住相談会の参加者偽装問題」のスクープなど一連の調査報道
〈作品概要〉安倍政権の地方創生政策を巡り、各地の自治体が都内で開いた移住相談会で一部参加者が現金で動員された問題をスクープ。内部資料や情報公開文書を分析し、自治体や受注企業、参加者の証言を集めるなど１年がかりの調査報道で違法な公金支出の実態を裏付けた。	
神戸新聞社 学校再生取材班 （代表）編集局報道部 井上 駿	教員間暴力のスクープと神戸の教育を巡る一連の報道
〈作品概要〉神戸市立小学校で起こった教員間暴力。複数の教員が１人の若手教員を羽交い締めにして激辛カレーを食べさせるなど前代未聞の事案だった。動画などをスクープするとともに数年来、不祥事が続く「神戸の教育」に照準を当て、背景や問題点を多角的に深掘りした。	
中国新聞社 河井夫妻問題取材班 （代表）報道センター社会担当次長 荒木 紀貴	河井克行前法相夫妻の買収事件のスクープなど一連の報道
〈作品概要〉昨夏の参院選で初当選した河井案里氏と夫で前法相の克行氏の公選法違反（買収）事件に絡み広島県内の全地方議員、首長計約５５０人を一斉取材。広く現金がばらまかれた実態を暴いた。国会閉会後に夫妻を立件する検察方針や「きょう逮捕」などをスクープした。	
愛媛新聞社 E F T問題取材班 （代表）編集局報道部経済班 丸岡 裕美	エヒメフードテクノロジー協同組合（E F T）を巡る一連のニュース
〈作品概要〉水産庁から施設改修に関し約１億５３００万円の補助金を受けた愛媛県松山市の「エヒメフードテクノロジー協同組合」が、水産物加工工場を一度も稼働できないまま解散していた問題をスクープしたのを皮切りに、多額の補助金を巡る不透明な動きを明るみに出した。	

「ニュース」部門（１５社２１件）	
被推薦者	作 品 名
日本放送協会 報道局経済部 新井 俊毅	「ヤフーがＺＯＺＯを買収へ」のスクープ
〈作品概要〉大手ＩＴ企業のヤフーが国内最大級のファッション通販サイトを運営するＺＯＺＯの買収を目指して、ＴＯＢ＝株式の公開買い付けを行う方向で最終的な調整を進めていることをスクープ。注目の経営者の前澤友作社長（当時）がみずから創業したＺＯＺＯの株式を売却するという情報も盛り込み、競争が激化するインターネット業界の再編の動きとして詳しく伝えた。	
日本放送協会 報道局政治部副部長 岩田 明子	「安倍総理大臣が東京オリパラの１年程度延期を提案へ」のスクープ
〈作品概要〉新型コロナウイルスの世界的な感染拡大を受けて、予定通りの開催が難しくなっていた東京オリンピック・パラリンピックについて、安倍総理大臣がＩＯＣのバッハ会長との電話会談で、１年程度の延期を提案する方針を固めたことをスクープ。	
日本放送協会 「遺骨問題」取材班 （代表）報道局社会部副部長 木村 真也	「戦没者遺骨の取り違え公表せず」の一連のスクープ
〈作品概要〉戦後７５年。戦没者の遺骨収集がいかにもずさんに行われていたのか。２年に及ぶ調査報道の末、フィリピンに加えシベリアでも遺骨が取り違えられていた疑いがあるにも関わらず厚労省が放置していた事実をスクープ。国は遺骨収集事業の抜本的な見直しに着手した。	
日本放送協会 政治部取材班 （代表）報道局政治部副部長 小嶋 章史	「中曽根康弘元総理大臣 死去」のスクープ
〈作品概要〉「戦後政治の総決算」などを掲げ、国鉄の民営化や日米安全保障体制の強化などに取り組み、戦後を代表する総理大臣となった中曽根康弘元総理大臣が死去したことをスクープ。戦後政治史の節目と感じる視聴者、読者も多く、特設ニュースなどで足跡を詳報した。	

「ニュース」部門（１５社２１件）	
被推薦者	作 品 名
フジテレビジョン 社会部司法クラブ （代表）ニュース総局報道局社会部主任 尾瀬 真澄	お笑いコンビ「チュートリアル」徳井義実氏による巨額申告漏れのスクープ
〈作品概要〉お笑いコンビ「チュートリアル」徳井義実氏による１億円を超える所得隠しと申告漏れをスクープ。報道を受けて徳井氏が謝罪会見し、芸能活動を自粛。お茶の間で人気の芸能人による税金問題の報道は、老若男女問わず国民の注目を集め、税に関する議論を促した。	

2020年度新聞協会賞応募作品一覧

「写真・映像」部門（16社21件）	
被推薦者	作 品 名
朝日新聞東京本社 編集局映像報道部 諫山 卓弥	ウイルス最前線
〈作品概要〉感染拡大が続く新型コロナウイルス。医療関係者や検疫官、消毒業者など、高リスクの現場で働く人たちがいる。マスクやゴーグル、フェースシールドの下にある素顔をポートレートスタイルで撮影し、最前線でウイルスと闘う一人一人の姿を浮かび上がらせた。	
朝日新聞東京本社 編集局国際報道部兼映像報道部 竹花 徹朗	「香港プロテスト」 自由を守る市民の闘いを追った写真報道
〈作品概要〉逃亡犯条例改正案への抗議から始まった一連のデモは、警察との衝突で激しさを増し、死者まで出た。同案は廃案となり、区議選では民主派が大勝したが、香港社会は分断され、深く傷ついた。怒りと歓喜、高揚と絶望が交錯し、揺れ続けた香港を半年間撮り続けた。	
毎日新聞東京本社 「明日へ」新型コロナ写真企画取材班 (代表) 編集編成局写真映像報道センター 大西 岳彦	「明日へ」新型コロナ写真企画
〈作品概要〉感染症の世界的な流行としては100年に1度ともいわれる新型コロナウイルスは、私たちの命だけでなく経済をも脅かし、その行動や社会を変容させている。先の見えない明日へと生きる一人一人の姿と声を、読者が共感を得られるように写し取って伝えた。	
読売新聞東京本社 写真部取材班 (代表) 編集局写真部次長 鷹見 安浩	「新型コロナウイルス禍の社会」を巡る写真特集
〈作品概要〉新型コロナウイルスの影響で変容する社会を写真グラフ特集で継続的に報じた。本紙写真記者の撮影によるグラフ面の掲載は6月15日現在で16回に及ぶ。新聞が有する「広い紙面と一覧性」という特質を最大限に活用し、未曾有の時代を多角的に記録した。	

「写真・映像」部門（１６社２１件）	
被推薦者	作 品 名
読売新聞東京本社 編集局写真部 飯島 啓太	ギリシャで途切れた東京五輪の聖火リレー
〈作品概要〉ギリシャで採火された東京五輪の聖火。新型コロナウイルスの感染が世界で拡大する中、聖火リレーはその翌日、突然打ち切られる異常事態に。聖火の到着を待った走者が落胆する瞬間を切り取った写真は、「五輪延期への序章」をとらえたとも言える１枚となった。	
日本経済新聞社 新型コロナウイルス取材班 （代表）編集局写真映像部次長 鈴木 輝良	新型コロナが生んだ「新常态（ニューノーマル）」
〈作品概要〉新型コロナウイルスは日本をかつてない混乱に陥れた。マスクが日常の光景になり、フェースシールドを使う人の姿も見慣れたものとなった。生活やビジネスの現場に「新常态（ニューノーマル）」が広がる。コロナ禍がもたらした「新しい景色」を写真でとらえた。	
東京新聞 編集局写真部 市川 和宏	日本のアインシュタイン
〈作品概要〉ノーベル化学賞受賞が決まった旭化成名誉フェローの吉野彰さんが、記者会見で見せたお茶目な表情だ。安倍首相から祝福の電話を受けた後に見せた一瞬を捉えている。天才物理学者アインシュタインの姿と重なり、吉野さんの人柄がにじみ出た作品である。	
産経新聞東京本社 「to Tokyo 変貌する街」取材班 （代表）写真報道局 松本 健吾	連載写真企画「to Tokyo 変貌する街」
〈作品概要〉時代時代で変貌してきた首都、東京の「今」を取材し、撮影技術や最新のデジタル表現を駆使してビジュアル化した。人が波となりうごめく渋谷、コロナ禍でも暗闇に灯るスカイツリー、空を覆う首都高。街は、正と負を合わせ持ちながら、進化と膨張を続けていた。	

「写真・映像」部門（１６社２１件）	
被推薦者	作 品 名
共同通信社 香港デモ取材班 （代表）中国総局 八田 尚彦	岐路の香港——「中国化」に抗う若者たち
〈作品概要〉香港が岐路に立たされている。「中国化」が進み、民主主義、自由、法治が失われつつある。デモ隊による議会占拠から、警官隊との激しい衝突を経て拠点が陥落するまで、若者たちの当局への抵抗を象徴する４枚を選んだ。	
時事通信社 編集局映像センター写真部 仲辻 史泰	最前線に空からエール
〈作品概要〉新型コロナウイルス対策で奮闘する医療従事者らに敬意と謝意を示そうと、航空自衛隊の「ブルーインパルス」が都心上空を飛行した。青空に白いスモークで直線を描き、太陽を突き抜けた飛行隊。業務に追われる医療関係者は空を見上げ、晴れやかな気持ちになった。	
岩手日報社 編集局報道部専任部長 太田代 剛	あしあと
〈作品概要〉東日本大震災から間もなく１０年。あの日、はるかかなたに思えた復興の日は近い。だが、そこに暮らす人々の心は、生活は日常を取り戻しているのか。かけがえのない人を亡くした遺族一人一人の足跡を、宮沢賢治の言葉とともに白黒写真で記録した。	
岩手日報社 ラグビーワールドカップ取材班 （代表）編集局報道部次長 菊池 範正	世界の祈り 釜石忘れない ラグビーワールドカップ日本大会
〈作品概要〉２０１９年９月２５日、東日本大震災で被災した岩手県釜石市でラグビーワールドカップが開かれた。市内の全児童生徒約２０００人がオリジナル合唱曲「ありがとうの手紙」を歌い、ウルグアイ、フィジー両国の選手が黙とう、被災地は鎮魂の祈りに包まれた。	

「写真・映像」部門（１６社２１件）	
被推薦者	作 品 名
静岡新聞社 編集局写真部 二神 亨	「森にきらめく」 県鳥・サンコウチョウ
〈作品概要〉 鳴き声が「ツキ（月）ヒ（日）ホシ（星）ホイホイホイ」と聞こえることから、サンコウチョウ（三光鳥）と名付けられている静岡県鳥。コバルトブルーのアイリングが特徴で、雄は長い尾で優雅に舞う。渡来、子育て、巣立ちなどを写真と動画で記録した。	
京都新聞社 編集局写真部 松村 和彦	徘徊だったのか
〈作品概要〉 認知症が疑われる状態だった男性の行方不明と、残された妻の思いを大胆な紙面構成で伝えた。亡くなった男性の行動を丹念に取材し、徘徊と呼ばれる行動のイメージを変えようと社会に訴えた。	
読売新聞西部本社 編集局写真部 中嶋 基樹	コロナの猛威、球児の夢砕く
〈作品概要〉 新型コロナウイルスの感染拡大で選抜高校野球大会が史上初めて中止になった。出場を決めていた創成館高（長崎県）の野球部員は、監督から決定を聞いたあと、ベンチで膝を折り泣き崩れた。	
沖縄タイムス社 編集局写真部 （代表）編集局報道本部写真部長 崎浜 秀也	焼け落ちた沖縄の象徴
〈作品概要〉 ２０１９年１０月３１日未明に発生した首里城火災をとらえたもので、小型無人機（ドローン）による炎上する正殿、涙ぐむ女子高校生などを撮影。歴史や文化、観光など琉球王国時代から脈絡と受け継がれる「沖縄の象徴」が焼失した「１日」の様子を記録した。	

「写真・映像」部門（１６社２１件）	
被推薦者	作 品 名
琉球新報社 編集局中部報道部 金良 孝矢	米軍普天間飛行場から流出した、毒性のあるPFOS（ピーフォス）を含む泡消火剤を捉えた写真
〈作品概要〉米軍普天間飛行場から流出した泡消火剤が、風にあおられ宜野湾市の住宅地に舞う様子を捉えた一連の写真は、改めて米軍基地から派生する被害が、騒音や空からの落下物だけでなく、大気や水質汚染にも及ぶことを目の当たりにさせる報道となった。	
琉球新報社 編集局報道本部写真映像部 （代表）写真映像部部長待遇 又吉 康秀	首里城焼失 沖縄県民の悲痛
〈作品概要〉２０１９年１０月３１日未明に発生した首里城正殿など８棟の焼損を取材。鎮火まで写真と動画で克明に記録し、紙面とホームページで報道した。証言力のある写真と映像は読者の反響を呼び、首里城再建に向けた機運醸成にもつながった。	
日本放送協会 NHKスペシャル「ラグビーワールドカップ取材班」 （代表）報道局スポーツ情報番組部チーフ・プロデューサー 川西 研	NHKスペシャル「死闘の果てに 日本vs. スコットランド」
〈作品概要〉団結・融和・献身・・・多くのメッセージを残したラグビー日本代表。高度な戦術や駆け引き・心理戦を、１００台以上のカメラで撮影した「自由視点映像」で可視化。選手やコーチの証言をもとに激闘を詳細に分析、驚異の映像で知られざるドラマを明らかにした。	
日本放送協会 長野放送局放送部カメラマン 早川 友康	千曲川の堤防が決壊し住宅街を襲う濁流の一報
〈作品概要〉台風１９号通過直後の１０月１３日早朝、長野市内を流れる千曲川の堤防が決壊し、茶色く激しい濁流が住宅街に流れ込む様子をいち早く生中継で全国に伝えた。高台から捉えたこの映像は、大きな被害が出ていることだけでなくさらに広範囲での被害を予感させた。	

「写真・映像」部門（１６社２１件）	
被推薦者	作 品 名
テレビ東京 ゴーン事件取材班 （代表）報道局ニュースセンター 阿部 欣司	ゴーン被告記者会見 日本テレビで唯一会場内から生中継
〈作品概要〉１月８日、レバノンに逃亡した日産元会長のカルロスロゴーン被告が記者会見を開いた。日本のテレビ局として唯一、テレビ東京記者が参加。独自映像を交えて会場内から生中継し、「あなたは法を犯した」と直接ただした。ゴーン被告は初めてそれを認めた。これは貴重な映像記録と考える。	

2020年度新聞協会賞応募作品一覧

「企画」部門（50社51件）	
被推薦者	作 品 名
朝日新聞社 大阪社会部・大阪映像報道部・デジタル編集部の取材制作チーム （代表）大阪本社編集局社会部次長 田村 隆昭	「あなたは誰ですか ルポ孤独死」 朝日新聞デジタル特集「プレミアムA」と関連報道
〈作品概要〉深刻化する孤独死の現状を追う企画「ルポ孤独死 あなたは誰ですか」は、デジタルと大型紙面を駆使した新しいプラットフォーム「プレミアムA」の一つとして、ジャーナリズムの新しい可能性を探究した。2本の長編ルポを中心に展開。現場に密着した臨場感ある表現に反響が寄せられた。	
毎日新聞東京本社 「にほんでいきる」取材班 （代表）人事部（前編集編成局社会部） 奥山 はるな	「にほんでいきる」 外国籍の子どもたちの学ぶ権利を問うキャンペーン報道
〈作品概要〉2019年4月の改正入管法施行で、日本は「移民社会」へとかじを切った。だが、在日外国人の子どもたちに対する教育施策は「義務教育対象外」を理由に乏しいままだ。国籍を問わず教育を受ける権利の拡充を訴え、共生社会実現に向けた動きを喚起している。	
毎日新聞東京本社 「桜を見る会」取材班 （代表）編集編成局統合デジタル取材センター副部長 日下部 聡	ネットを主舞台に展開した一連の「桜を見る会」追及報道
〈作品概要〉「桜を見る会」で何が起きたのか、そもそも何が問題なのかを、SNSを通じて届く人々の声に呼応して100本近い長文記事で掘り下げ、その本質を明らかにした報道。デジタル全盛の時代に、ジャーナリズムの新たな可能性を示した。	
読売新聞東京本社 「スポーツの力」取材班 （代表）編集局編集委員 結城 和香子 編集局編成部次長 藤田 信昭	スポーツとは何かを様々な分野から検証した年間企画「スポーツの力」
〈作品概要〉私たちとその社会にとって、体を動かし、心を動かす広い意味でのスポーツが、どんな意味や価値を持ち得るのかを、国内外の事例や最新の知見も踏まえ掘り下げた。1面と特集面で視覚的に展開、動画も連動させて、読者の気づきや行動変容を促せるよう工夫した。	

「企画」部門（５０社５１件）	
被推薦者	作 品 名
日本経済新聞社 「日経ビジュアルデータ」コロナ取材・制作班 (代表) 編集局メディア戦略部次長 佐藤 賢	ビジュアルマップ・チャートで描く新型コロナショック
〈作品概要〉新型コロナウイルスの感染はどう広がり、収束に向かったのか。人やモノ、金融の動きにどう影響したのか——。地図やチャートなどビジュアル表現でデータを可視化した。データは毎日更新し、世界、日本、経済など複眼的な視点でコロナショックの実相を描いた。	
日本経済新聞社 「チャートは語る」チーム (代表) 編集局データ報道部次長 三木 朋和	連載ニュース企画「チャートは語る」
〈作品概要〉データから経済・社会の新潮流や課題を発掘し、チャートで伝えるシリーズ企画。最新技術を駆使して公開データを収集・分析。人工衛星や携帯電話などの代替データも活用して変化の波頭をとらえた。デジタル時代の新しい報道手法を追求した。	
東京新聞 「働き方改革の死角」取材班 (代表) 編集局経済部次長 池尾 伸一	連載企画「働き方改革の死角」を中心とする雇用問題に関する一連の記事
〈作品概要〉政府の働き方改革で働きやすい職場は実現するか。働く人目線で総点検、様々な抜け穴やほころびを明らかにした。取材班が指摘した立場の弱い人たちの安全網の乏しさのリスクは新型コロナ感染拡大で現実。人々の窮状を先行報道、緊急対策の欠落点も明示した。	
産経新聞東京本社 「灯す」取材班 (代表) 大阪本社編集局長（前東京本社編集局編集長） 島田 耕	「灯す」
〈作品概要〉タイトル「灯す」に込めたのは、「引き継ぐ」という営みである。１９６４年東京五輪が残したものを今の世代が引き継ぎ、２０２０年東京五輪を次代が引き継ぐ。世代間の営みを聖火の受け渡しに重ね、五輪開催を通して日本と東京が目指す国・社会のあり方を考察する。	

「企画」部門（５０社５１件）	
被推薦者	作 品 名
産経新聞東京本社 台湾総統取材班 （代表）編集局編集委員兼論説委員 河崎 真澄	李登輝～陳水扁～蔡英文 台湾の３人の総統と東アジア
〈作品概要〉台湾民主化の立役者、李登輝氏、そのバトンを受け継いだが退任後逮捕された陳水扁氏、民主主義の価値を守る戦いを続ける蔡英文氏。新旧３総統への密着取材は長期連載やスクープに結実し、激動の東アジアに生きる台湾の歩みを克明に描き出した。	
産経新聞東京本社 編集局副編集長 藤本 欣也	香港に生きる～反政府デモと「一国二制度」の死
〈作品概要〉自由を希求する若者たちに寄り添い、国際金融都市・香港の運命に迫り続けたリポート。反政府デモの本格化、激しい弾圧、民主活動家らの挫折…「一国二制度」に守られた「自由主義の砦」が国家安全維持法の施行で崩壊するまでを、普通に生きてきた人々の視点で描き出した。	
共同通信社 編集局編集委員 太田 昌克 同 磐村 和哉	北朝鮮核危機に関する長期連載企画「核危機の源流 失敗の本質を問う」
〈作品概要〉北朝鮮との非核化交渉に関与した日米韓中ロの元閣僚ら３４人を取材し、外交交渉が失敗した理由と背景を究明した。現場を訪れた専門家が明かした核開発の実態や、第２次朝鮮戦争のリスクを意識した日米当局の動きなどを克明に追い、将来への教訓を導き出した。	
読売新聞大阪本社 編集局社会部 上村 真也	夕刊連載「ハレルヤ！西成 メダデ物語」
〈作品概要〉日雇い労働者の街、大阪・西成で小さな教会を主宰する女性牧師の日常を追った全３部、計７０回の長期連載。口は悪いが情も人一倍厚い牧師が、社会の底辺を歩んできた野宿経験者らの立ち直りを信じ、救いの手を差し伸べる姿が読者の大きな反響を呼んだ。	

「企画」部門（５０社５１件）	
被推薦者	作 品 名
産経新聞大阪本社 「生きづらさ」を生きる取材班 （代表）編集局社会部次長 内海 俊彦	連載「発達障害『生きづらさ』を生きる」と発達障害に関する一連の報道
〈作品概要〉先天性の脳機能障害とされ、外見からはわかりづらい特性のため周囲とトラブルを起こしやすい発達障害を主題とし、当事者や家族らの生きづらさの実態を多角的に紹介した。読者から寄せられた意見や疑問を取り入れ、双方向の記事で新しい新聞の魅力づくりにも挑戦した。	
産経新聞大阪本社 夜間中学取材班 （代表）編集局社会部次長 河居 貴司	連載企画「夜間中学はいま」
〈作品概要〉戦争や貧困、不登校などで義務教育を十分に受けられなかった人たちが通う夜間中学に焦点を当て、複雑な背景を持つ生徒たちの姿を通して「学び」とは何かを探るとともに、「いま」の日本社会の実像を描き出した。	
北海道新聞社 「ニセコのキセキ」取材班 （代表）編集局経済部次長 宇野 一征	連載企画「ニセコのキセキ」
〈作品概要〉日本を代表する国際リゾートへと変貌を遂げたニセコ地域の開発ラッシュの動向、その過程で生じた観光公害やインフラ整備の遅れなど急成長の「奇跡」と「軌跡」を追い、持続可能な観光のあり方や交流人口増加策などを探った。	
十勝毎日新聞社 年間キャンペーン取材班 （代表）編集局政経部長 能勢 雄太郎	年間キャンペーン「インフラ再考」
〈作品概要〉１年間のテーマを定めて展開する恒例のキャンペーン。経済活動や人的交流の変化、気象変動を背景にした災害の多発など社会情勢の変化を受けて、①道路ネットワーク②老朽橋梁問題③砂防④農業生産基盤——を中心に社会基盤の在り方を考えた。	

「企画」部門（５０社５１件）	
被推薦者	作 品 名
河北新報社 治水のゆくえ取材班 （代表）編集局報道部長 今里 直樹	連載企画「決壊」－台風１９号 治水のゆくえ
〈作品概要〉東北で５３人が犠牲となった２０１９年秋の台風１９号（東日本台風）を受け、東北の治水の現状と限界、今後の展望を探った。広域的な被害状況とその背景などを検証しつつ、不可避の水害を見越した対策のありようを提示した。	
秋田魁新報社 ３年生へのエール取材班 （代表）統合編集本部報道センター運動部長 平野 順	高校運動部３年生３０００人へのエール——新型コロナ禍の年に
〈作品概要〉新型コロナウイルスに部活動最後の大会を奪われ、目標を失った高校３年生約３０００人の氏名を刻み、エールを送った特集紙面。東京五輪が延期となった国内トップ選手など各競技の先輩や一般県民約２００人からの激励も掲載し、３年生たちの背中を押した。	
福島民報社 台風１９号・記録的大雨取材チーム （代表）編集局報道部長 円谷 真路	防災・減災キャンペーン 備える いのちを守る 台風１９号 一連の報道
〈作品概要〉２０１９年の台風１９号と記録的大雨は、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故からの復興へと歩む福島県に大きな被害をもたらした。県民がどう行動したのかを検証する「その時、私は」、さらに防災・減災キャンペーンとして、他県の被災地に学ぶ企画などを展開した。	
福島民友新聞社 「風評の深層」取材班 （代表）編集局報道部 水野 智史	連載企画「風評の深層」およびトリチウム水をめぐり一連の報道
〈作品概要〉「福島の風評必至」と議論されるトリチウムとは何か。見えない不安が風評の原因なら、実像を直接見ようと記者は挑んだ。濃度が薄ければ健康影響はほぼ無いと実感。しかし漁業者らは「科学だけの問題ではない」と言う。政府に足りないものが見えてきた。	

「企画」部門（５０社５１件）	
被推薦者	作 品 名
上毛新聞社 八ッ場ダム取材班 （代表）編集局地方部前橋支局 斉藤 弘伸	連載「八ッ場新時代～動きだす地域再生」など八ッ場ダムを巡る一連の報道
〈作品概要〉計画発表から６８年。紆余曲折を経て八ッ場ダムが完成した。反対、賛成、中立に分かれ地域社会は分断、民主党政権下では無駄なダムとされ工事が中断した。多大な犠牲を払って出来上がるダムを生かそうと奮闘してきた人々と、語り継ぐべき歴史を追った。	
神奈川新聞社 やまゆり園事件取材班 （代表）統合編集局報道部遊軍キャップ 田中 大樹	やまゆり園事件考
〈作品概要〉神奈川県立知的障害者施設「津久井やまゆり園」で２０１６年７月、入所者１９人が殺害された。事件から丸３年の節目から死刑判決確定までを詳報。さらに社会に潜む優生思想や匿名裁判の是非、死刑の意味など、事件が我々に投げ掛けた課題を追い、問題提起した。	
山梨日日新聞社 「守る命」取材班 （代表）編集局報道部 土屋 圭佑	「守る命」キャンペーン報道
〈作品概要〉災害発生時、県民に命と暮らしを自ら守る行動を取ってもらうため、防災に役立つ情報を「特集」と「連載」で提供した。災害の発生が想定される時期の前に掲載することで、住民に災害への備えを促し、警戒してもらう「事前啓発型」の報道を目指した。	
静岡新聞社 「サクラエビ異変」取材班 （代表）編集局社会部 坂本 昌信 編集局豊橋支局長 遠藤 竜哉 編集局蒲原支局長 吉田 直人	サクラエビ異変
〈作品概要〉指先ほどの小さな生き物が駿河湾から「いなくなった」ことを契機に、漁師らの取り過ぎ（乱獲）だけではなく、産卵場に注ぐ富士川中流の集落に水害を引き起こしていたダムの堆砂や不法投棄問題など森川海と人の連環からその原因に肉薄した長期調査報道である。	

「企画」部門（５０社５１件）	
被推薦者	作 品 名
信濃毎日新聞社 「記憶を拓く」取材班 （代表）編集局報道部デスク 田中 陽介	連載企画「記憶を拓（ひら）く 信州 半島 世界」
〈作品概要〉元徴用工問題で対立する日韓。国益を懸けた二項対立の先に解決は望めないとの視点から、「国」の枠組みを置き、松代大本営地下壕工事の動員朝鮮人ら多面的な「個人」の記憶に迫った。歴史からこぼれた事実や証言の上に対話と共感の土台をつくる道を示した。	
中日新聞社 編集局生活部編集委員 三浦 耕喜	「生活部記者の両親ダブル介護」「わけあり記者がいく」共生社会を 読者とともに考える一連のコラム連載
〈作品概要〉父親母親ともに要介護となり、支える筆者もパーキンソン病の診断を受けた。そんな「わけあり記者」が自らの介護や闘病の日々をつづったコラム連載。家族の介護や病気に悩む人たちを勇気づけるとともに、目指すべき共生社会のあり方を示した。	
新潟日報社 長期企画「３００^{キロ}のコントラスト」取材班 （代表）編集局報道部長代理 阿部 義暁	長期企画「３００^{キロ}のコントラスト」
〈作品概要〉新潟と東京は３００^{キロ}の距離を隔て対照的な現実と向き合っている。人口減が進む新潟と一極集中が加速する東京。しかし、効率を最優先した集中は過密を生み、東京はウイルス禍に振り回される。問われているのは価値観と生き方。集中と効率だけでなく、支え合いと思いやりを互いに紡ぐ社会が求められている。	
北日本新聞社 「デポルターレの扉」取材班 （代表）編集局報道本部部长 高松 剛	連載企画「デポルターレの扉」
〈作品概要〉私たちはスポーツの価値を理解しているだろうか。運動に汗する人々の姿を通じて健康づくりにとどまらない多面的な価値を探った。そんな折、新型コロナウイルスが世界で猛威を振るう。歓声が消えた日々だからこそ気付くスポーツの意義や素晴らしさを見つめた。	

「企画」部門（５０社５１件）	
被推薦者	作 品 名
京都新聞社 京アニ事件取材班 （代表）編集局報道部社会担当部長 目黒 重幸	京都アニメーション放火殺人事件を巡る一連の報道
〈作品概要〉３６人の犠牲者を出した京都アニメーション放火殺人事件で、容疑者の動機につながる供述をいち早くスクープしたほか、特設紙面などで犠牲者の足跡を詳報。マスコミ批判に応える企画や火災発生時の検証など、多角的な報道で事件の全容に迫った。	
神戸新聞社 「いのちをめぐる物語」取材班 （代表）編集局報道部 紺野 大樹	連載「いのちをめぐる物語」と終末期を考えるキャンペーン報道
〈作品概要〉高齢化社会を迎え、終活やみとりなどの言葉に触れる機会が増えた。だが、多くの人は病院で人生を終え、死は今も私たちの日常から遠い存在だ。死について考えることは、生について問うことでは？ 記者たちはそう話し合い、さまざまな「生と死」を見つめた。	
山陽新聞社 西日本豪雨取材班 （代表）編集局報道本部長 桑原 功	連載企画 西日本豪雨「一步、また一步 災害から復興へ」
〈作品概要〉岡山県は２０１８年７月の西日本豪雨で、戦後最大級の水害に見舞われた。最も被害の大きかった倉敷市真備町地区では、時間の経過とともに被災者の生活再建の歩みに差が表れている。その実情に迫り、一人も取り残さない支援の在り方を探った。	
中国新聞社 「ヒロシマの空白」取材班 （代表）編集局報道センター ヒロシマ平和メディアセンター長 金崎 由美	「ヒロシマの空白 被爆７５年」「ヒロシマの空白 被爆７５年 街並み再現」
〈作品概要〉広島原爆の犠牲者は「１４万人±１万人」とされるが、推計値に過ぎない。広島市が把握するのは８万９０２５人にとどまり、実際の犠牲者数は不明だ。７５年を経てなお未解明の被害実態とその背景、今まだできる「空白」を埋める手だてを探った。	

「企画」部門（５０社５１件）	
被推薦者	作 品 名
山陰中央新報社 幸せのカタチ取材班 （代表）編集局総合デスク長 小玉 泰宏	幸せのカタチ～人生１００年時代の生き方～
〈作品概要〉日本が直面する少子高齢化社会は、果たしてディストピア（暗黒社会）なのか。歩み方次第で、希望ある未来が見えるのではない。人生１００年時代を迎えて価値観がめまぐるしく変化する中で、幸せのカタチを考察し、地方における生き方を提案した。	
徳島新聞社 編集局報道本部政経班副主任 乾 栄里子	連載「性暴力とたたかう」と国際女性デーに合わせた一連のキャンペーン報道
〈作品概要〉心と体を深く傷つける性暴力。どのようにすれば社会から性暴力がなくなり、女性や子どもがおびえなくてもいい社会にできるのか。被害体験を聞いたり、支援団体の取り組みを取材したりして性暴力の本質に迫るとともに、被害を訴えにくい社会的背景にも迫った。	
高知新聞社 奈半利町ふるさと納税事件取材班 （代表）編集局報道部副部長 大山 哲也	虚（うつ）ろな税（ちから）～奈半利事件の実相～
〈作品概要〉ふるさと納税で全国屈指の寄付金を集めていた高知県奈半利（なはり）町。だが、舞台裏では過度な返礼品競争がもたらした不正と汚職が起きていた。県警の強制捜査前から取材班が追いつけた海辺の町の内実と制度のゆがんだ運用実態を連載企画としてまとめた。	
西日本新聞社 「ひずむ郵政」取材班 （代表）編集局社会部 宮崎 拓朗	キャンペーン報道「ひずむ郵政」
〈作品概要〉郵便局員や顧客の証言を元に、郵政グループで発覚した保険の不正販売の全体像に迫った。情報提供は１千件に及び、約２年間で１００本を超える記事を展開。行き過ぎたノルマ主義や顧客を軽視した営業現場の実態を報じ、巨大組織が抱える病巣を浮き彫りにした。	

「企画」部門（５０社５１件）	
被推薦者	作 品 名
西日本新聞社 中村哲医師取材班 （代表）編集局社会部 中原 興平	アフガニスタンで凶弾に倒れた中村哲医師を巡る報道～連載、子ども向け特集、特別サイト
〈作品概要〉長年支援活動が続けたアフガニスタンで昨年１２月、銃撃され亡くなった福岡市のＮＧＯ現地代表、中村哲医師の足跡を本人の寄稿も交えて詳報。子ども向け「もの知りこどもタイムズ」やウェブの特別サイトも通じ、中村医師が残したもの、活動の意義を多角的に伝えた。	
熊本日日新聞社 熊本発ＳＤＧｓ取材班 （代表）編集局編集委員室編集委員兼論説委員 小多 崇	熊本発ＳＤＧｓ 持続可能な未来へ
〈作品概要〉高齢化、人口減少、貧困や格差、そして熊本地震、新型コロナ…激変する時代環境の中、熊本の地域社会に未来は、「持続可能性」はあるのか。国連の「持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）」を座標軸としながら、さまざまな現場で問題と向き合い、行動する人々を見つめ直す。	
大分合同新聞社 ラグビーＷ杯取材班 （代表）編集局報道部編集委員 田尻 雅彦	ラグビーＷ杯を軸とした年間企画「切り拓け おおいた新時代」と一連のＷ杯報道
〈作品概要〉列島を熱狂させた昨秋のラグビーＷ杯日本大会で、大分県は準々決勝を含む５試合を開催した。世界三大スポーツの祭典と称されるビッグイベントは九州の一都市をどのように変えるのか。１１５万県民の挑戦を追い、Ｗ杯を切り口に地方の未来と可能性を考察した。	
沖縄タイムス社 編集局 （代表）取締役編集局長 与那嶺 一枝	首里城火災と復興に関するキャンペーン報道
〈作品概要〉昨年１０月末、那覇市の首里城公園で火災が発生。本紙は火災発生当初からのキャンペーン報道により文化財焼失が社会に与える影響の大きさを伝えた。また今年を「再建元年」と位置づけ、多彩な連載や企画で首里城復興の在り方を県民と共に考え続けている。	

「企画」部門（５０社５１件）	
被推薦者	作 品 名
琉球新報社 沖縄戦 75 年取材班 (代表) 編集局次長兼編集委員 (沖縄戦 75 年担当) 兼写真映像部長 小那覇 安剛	沖縄戦 75 年 証言を掘り起こし「戦争死」の実相を探った一連の報道
〈作品概要〉終戦 75 年に合わせ南洋群島から対馬丸撃沈、沖縄戦までの新証言や調査報道に基づく特報、読者公募型の各連載で多面的に伝えた。体験者が急速に減少する中、戦争が引き起こす死の実相「戦争死」を探り、コロナ禍における継承の在り方を提言した。	
日本放送協会 札幌放送局放送部ディレクター 宮内 亮吉	NHK スペシャル「ふり向かずに 前へ 池江璃花子 19 歳」
〈作品概要〉“東京五輪最大のヒロイン”と期待されながらも、白血病で夢を絶たれた、競泳の池江璃花子さん。1 年近く表舞台から姿を消していたが、その闘病と再起への舞台裏に独占密着。当たり前の日常に感謝しながら一步一步進む姿を通して、大きな勇気や希望を与えた。	
日本放送協会 NHK スペシャル「クルーズ船」取材班 (代表) 報道局社会部番組部チーフ・プロデューサー 森田 超	NHK スペシャル「調査報告 クルーズ船～未知のウイルス 闘いのカギ～」
〈作品概要〉新型コロナウイルスの集団感染が起きたクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」。乗員乗客、官僚、政治家、医師など 50 人以上への取材や内部資料の解析などから、船内の実態を浮かびあがらせ、国も公にしていなかった検証を独自に行い、教訓を明らかにする。	
日本放送協会 仙台・盛岡放送局「N スペ・大槌」取材班 (代表) 仙台放送局放送部ディレクター 倍井 智史 盛岡放送局放送部ディレクター 林 沙羅 盛岡放送局釜石支局 市毛 裕史	NHK スペシャル「40 人の死は問いかける ～大槌町“役場被災”の真実～」
〈作品概要〉東日本大震災の津波で、岩手の大槌町役場は町長や職員の多くが役場庁舎で犠牲となり 40 人が亡くなった。幹部の証言を軸に、行動や判断の背景を記録や映像、写真をもとに探り、津波襲来までの約 35 分間に迫る。危機における組織と個人の在り方を問いかけた。	

「企画」部門（５０社５１件）	
被推薦者	作 品 名
日本放送協会 NHKスペシャル「全貌 二・二六事件」取材班 （代表）大型企画開発センターディレクター 右田 千代	NHKスペシャル「全貌 二・二六事件～最高機密文書で迫る～」
〈作品概要〉近代日本最大の軍事クーデター「二・二六事件」の内幕を記した最高機密文書をスクープ。海軍が極秘の見張り所や調査部隊を使って、事件を分単位で記録していたことが判明。専門家と共に１年に渡って分析し、新事実の数々を映像化。知られざる全貌に迫った。	
TBSテレビ 報道局社会部 守田 哲	池袋暴走母子死亡事故で、容疑者への単独インタビューや遺族男性の実名公表をめぐる一連の独自報道
〈作品概要〉池袋暴走事故をめぐり、事故を起こした８７歳の旧通産官僚OBの取材に唯一成功。妻と娘を亡くした遺族の男性が「実名」を告白するまでや、遺族の男性に寄せられた１万通の手紙について取材し、悲惨な交通事故を減らすための活動にどこよりも迫った。	
日本テレビ放送網 NNNドキュメント“封印”取材班 （代表）報道局チーフディレクター 清水 潔	NNNドキュメント２０「封印 沖縄戦に秘められた鉄道事故」
〈作品概要〉日本最悪の鉄道事故が封印されていた。昭和１９年１２月に沖縄県で２２０人が死亡した列車爆発事故。太平洋戦争で米軍が上陸する４か月前に、どんな事故が起き、なぜこの事故は封印されてきたのか。そして沖縄戦への影響は。未曾有の鉄道事故を調査した。	
テレビ朝日 報道局クロスメディアセンター （代表）報道局クロスメディアセンター長 西村 大樹	テレ朝news 特設サイト「●REC from 311～復興の現在地」及び「まいにち防災」
〈作品概要〉東日本大震災直後から撮影し続けた映像をインターネット用に編集し、各地の復興の過程が地図上で分かる「REC from 311」。地図にカレンダーの要素も加え、防災、減災を訴える「まいにち防災」。いずれもネットならではの手法で報道映像に新たな可能性を生み出した。	

「企画」部門（５０社５１件）	
被推薦者	作 品 名
読売テレビ放送 報道局報道部 橋本 雅之	y t v ドキュメント 私の夫は“無精子症” 日本を揺るがす男性不妊
〈作品概要〉約６組に１組の夫婦が不妊に悩む日本。原因の半分は男性側にある。精子の数が少ない「乏精子症」や１００人に１人の「無精子症」。４人に１人の男性が不妊のリスクを抱えている。男性不妊の実態に迫り、不妊大国ニッポンの課題を探るドキュメンタリー。	
JOD（オンデマンド調査報道）パートナーシップ（新聞２２社※） （代表）西日本新聞社 編集局クロスメディア報道部デスク 福間 慎一ほか２２人 ※２２社＝北海道、東奥、岩手日報、河北、山形、東京、新潟、北陸中日、北日本、福井、信濃毎日、岐阜、静岡、中日、京都、神戸、中国、山陰中央、徳島、高知、西日本、琉球	地方紙連携による課題解決型調査報道の全国ネットワーク構築
〈作品概要〉LINEなどで記者が読者とつながり、課題解決を目指すオンデマンド調査報道（JOD）に取り組む地方紙がつながって、全国をカバーできるJODパートナーシップが完成。情報や記事を日常的に共有して協働し、より良い社会へつなぐ新しい報道を生み出した。	
「コトバのチカラ２０２０」プロジェクト（新聞・放送１６社※） （代表）沖縄タイムス社 総合メディア企画局デジタル部 與那覇 里子ほか１５人 ※１６社＝北海道、東奥、岩手日報、秋田魁、新潟、北日本、NHK、報知、中京テレビ、山陽、徳島、愛媛、熊本日日、宮崎日日、沖タイ、琉球	「コトバのチカラ２０２０」のメディアコラボレーションキャンペーン
〈作品概要〉新型コロナウイルスの時代に人々を勇気づけるアスリートの言葉を伝えるサイト「コトバのチカラ」を創設。メディア２４社が組織を越えて結集し、洗練されたデザインのプラットフォームから各社サイトにシームレスに遷移できる新しい報道の形を実現した。	